一日限りの変身

鈴木一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一日限りの変身

【Ｎコード】
Ｎ５７２０Ｗ

【作者名】
鈴木一郎

【あらすじ】
「唯のデートじゃつまんない！」
そう言った明花は、俺を自分の姿にした。全く、何がしたいんだか……。
なんでもありの力を持つ少女に振り回される少年の、ハチャメチャラブコメディ。

第一話（前書き）

注意

この作品のみでも楽しめますが、「一日限りの入れ替わり」を先に読まれた方が楽しめます。

第一話

唯のデートじゃつまんない――明花はそう言った。
だが、俺を双子みたいな外見にして、そのデートのどこが面白いのだろうか。
「ほら、顰め面しないの。せっかくの美貌が台無しになるわよ」
「……残念だったな。そう言われても嬉しいとは全く思わん」
俺は勝手にずり下がるボクサーパンツを必死に上げながら言った。別にこいつの裸体など見飽きるほど見ているのだが、見せるのはなんか恥ずかしい。
一方明花は、素っ裸で寝ていたらしい。布団の近くに、俺が昨日つけていた下着が散乱している。まあ裸で寝た方が保温効果も高いというし、別に悪くはないんだが……。恥ずかしくないのか、こいつは。
「あー、でも、まだデートには早いわね。八時になったら起こして」
そういうと明花は再び布団にもぐろうとする。俺は彼女の腕を掴んで強引に引きずりだした。
「何すんのよ、痛いわね」
「うるさい。お前が勝手に寝ようとするからだ」
「じゃああんたも一緒に寝れば、問題はないわね」
次の瞬間、俺は布団の中に勢いよく引きずり込まれていた。妖美な笑みを浮かべながら明花は俺を逃がすまいと、俺の身体の上にのしかかる。乳房が乳房に押しつぶされ、ほとんど息もできない。
「ほーら、一緒に寝ましょうか」
「……こんな状態で寝られるか」
「つべこべ言わない」
明花はにやっと笑うと、俺の唇を塞いだ。自分の唇で。
唇を離されると同時に、急激な睡魔が襲ってきた。くそ、力を使いやがったな……。

俺の意識はブラックアウトした。
目が覚めた時には十二時を回っていた。既に明花の姿はなく、俺は一人、布団の中で丸くなっていた。無論、素裸で。俺はくしゃみをしながら立ち上がった。
「あら、ようやく起きたのね」
キッチンでは明花が朝食、いや昼食の準備をしていた。そうめんだった。朝っぱらからそうめんってどうよ？　いや、もう朝じゃないけどさ……。
俺は釈然としないまま、つゆをできるだけ水で薄め、その中にそうめんを投げ込んで食べた。それらを食べ終えると、俺と明花は御馳走さまと両手を合わせた。こういうのはやはり、重要なことだと思う。
「それで、デートに行くのよね？」
「ああ、その予定だったが？」
明花はにやにやと薄気味悪い笑顔を浮かべている。何が言いたいんだろうな、こいつは。
いや、予想はできるよ。できるけどさ。人間、触れたくないものってあるじゃない。例えばそれは豆腐だったり、納豆だったり、オクラだったり……って俺は何を言っているんだろうね。
「と言うわけで、お着替えタイム！」
俺の悲鳴は、家の辺りで寝ていた猫たちを起こすことになっただろう。
数時間後、やけに豪奢な服を着たツインテールの少女と、やけにボーイッシュな格好をしたポニーテールの少女が家から出てきたのを、お隣さんは目撃した。
どちらがどちらかかは、言うまでもないよな？

第二話

全く明花の奴め、どこで買ったのか知らんが動きにくいドレスなんて買いやがって。

幸い移動は彼女の力を利用してのことだったので、知人に見られることはなかった。遊園地も六駅ほど先にあるからな。

しかしなんかこう……このドレスは肩が凝る。

「あら、そう？」

明花は不思議そうにこちらを覗き込んできた。全部お前の責任だろうが、と言いたかったが、俺は何も言わなかった。

だって……だって恋人の満面の笑みなんて見せられたら普通反論できるもんじゃないだろ？

広大な割に空いている遊園地には、マスコットキャラクターたちが暑くないようにと打ち水に励んでいた。このクソ暑い中、中の人は大変だろうな。子供たちがきゃっきゃと笑いながらスカートの裾をたくし上げ、一心に水を浴びていた。

「最初はどれから乗るつもりだ？」

「そうねぇ……定番ってことでジェットコースターにする？」

「この格好でジェットコースターか？」

「なによ、何か不満でもあるわけ？」

大ありだ。こんな暑苦しい格好はいい加減やめてほしい。明花は一つため息をつくと、俺を女子用のトイレの個室に引っ張り込んだ。細く華奢な身体をのしかからせるようにして俺にぐっと顔を近づける。俺は不覚にもどきりとした。

明花が一回、指を鳴らす。

その瞬間、俺の服装は明花のそれと全く同じものになっていた。

「せっかく似合ってたのに……」

「じゃあ自分で着ろよ」

「嫌よ。肩がこるんだから」

俺達はそう言いあいながら、ジェットコースターの搭乗口に向かった。
ここのジェットコースターは難易度と言うべきか身長制限がそれぞれ会って、大きなお友達も小さなお友達も楽しむことができるようになっている。俺達は一番身長制限が高い物を選んだ。
……デートにはハードすぎやしませんか。明花さん。
俺は一抹の不安を覚えながら空いている搭乗口の階段を上り、ジェットコースターに乗り込んだ……。
「……ちょっときつかったわね」
「……ああ」
俺達は生き地獄って本当にあるんだー、とか、天使様の降臨が見えるー、とかそんなレベルに錯乱していた。千鳥足であっちへふらふら、そっちへふらふら。クレープ屋の屋台に激突して二人同時に倒れた。
「だ、大丈夫かい？　お嬢ちゃんたち」
クレープ屋の屋台から中年のおっさんが降りてくる。彼が伸ばした腕につかまり、俺達は何とか立ち上がった。
「せっかくだから、クレープ、食べていかないかい？」
「それはナンパですか？」
俺が即座に切り返すと、おっさんは困ったように頭を掻いた。いやあんた、帽子被ってるから。頭掻いても、意味ないから。
「まあいいわ、明花。せっかくだし食べていきましょう」
「そうね、愛花」
明花が答え、こちらに向かってウインクする。なるほど、今日の俺の名前は愛花か……。
俺はチョコレートアイスののったやつを頼み、明花はイチゴがのったやつを頼んだ。合計は千円を超した。無論『姉』である俺が支払うことになった。
近くのベンチでクレープを食べ終えると、俺達は次はどこへ行こうか、と地図を広げた。デートの定番と言えばコーヒーカップやメ

リーゴウランドなどだろう。
だがそれは、明花のことをよく知らない人間が選択することだ。
明花は要するに、彼女いわく『生ぬるい』乗り物が大嫌いなのだ。ちんたらバイクを走らせる人間がいたら、パッシングするタイプの少女だからな。明花は。全く、付き合いきれん。
……付き合ってるけどさ。
「じゃあ次は、ワンランク低いジェットコースターに乗りましょうか」
「ま、またかよ……」
俺はため息をつきながらも彼女に同伴した。やれやれ、すっかり尻に敷かれてるな。
でも、嫌ではない。
そんな甘ったるい考えしか持てなかった俺は、本日二度目のジェットコースターに悲鳴を上げさせられることとなった。

第三話

「あんた……大丈夫？」
「じぇ……じぇえんじぇん」
全然、と言いたいのに上手く口に出せない。嗄れた喉から出てきたのはか細い声。流石にジェットコースター全制覇はきつかった。一体何個ジェットコースターがあると思う？
聞いて驚け。二十個だ。大して広くもない敷地に、二十個だぜ？
狂ってるとしか思えない。ていうか、マジでこの遊園地の設計者は正気か？
俺は明花から受け取ったペットボトルを一気飲みする。明花が既に口をつけており、量は四分の一くらいになっていたが。俺はそれを全て飲み干した。
「あんたねぇ……遊園地の自販機は高いのよ？」
「さっき俺がクレープ奢ったろ。それでチャラだ」
明花はけだるそうにため息をつき、はいはいと呟いた。俺はふらつく身体をなんとか立て直しながら地図を開く。
「さて……次はもっとハードルの低い乗り物がいいな」
「じゃあ最後から五番目に乗ったジェットコースターに……」
「……なんでお前はジェットコースター限定なんだ」
口論の結果、結局腹ごしらえと言うことになった。俺達は敷地内にあるバーガーショップに向かうと、そこで食事をした。俺はハンバーグが二つ挟んであるやつで、明花はチーズバーガーだった。
バーガーショップは喫煙席と禁煙席とが薄いガラス板で仕切られているものの、煙草の紫煙は防げそうもなく、室内は煙草臭かった。明花と俺は顔をしかめて黙々とハンバーガーを口に運んだ。
俺達が向かい合って食事しているところへ、一人の男がやってきた。髪を茶に染め、耳や鼻にピアスをしている。明花が彼を見て一瞬頬を緩めたのは、牛を連想したからに違いない。

「ねえ彼女、一人？」
「残念だったわね、二人よ」
「君、面白いねー」
男に口説かれたってちっとも面白くない。女子って常にこんな気分なのだろうか。俺は男が回してきた腕をはたき落とす。男は少し残念そうな顔をしたものの、すぐに明花の方へと顔を向けて笑顔を送る。
「よかったらさ、俺と一緒に遊園地巡りしない？」
「お断りするわ」
「そんなこと言わずにさー、ほら、女の子二人だと何かと危険じゃない？」
「悪かったな」
ぶすっとして俺は小声で呟いた。男は一瞬こちらに顔を向けたものの、すぐに明花に向き直った。
「悪いけど、私たちデート中なの。邪魔しないでもらえる？」
途端に、男が怪訝そうな顔つきになる。俺も男と似たり寄ったりの表情をしていただろうと思う。確かにデートだけどさ。
たとえばあんたが道端で寸分の違いもない双子にあったとする。その双子が大通りのど真ん中でキスしてたらどう思うよ？　普通引くだろ。
「デート？　……双子で？」
「別にいいじゃない。同性愛が嫌なら、さっさとあっちにってほしいわね」
「……相手が男じゃなけりゃ、俺は大歓迎だよ」
男はゆっくり明花に向かって手を伸ばした。その瞬間、明花の目つきが鋭くなる。嫌悪感を顕わにし、男を凄まじい形相で睨みつける。コップに入った水を掴むと、男に勢いよくぶっかけた。男が全身ずぶ濡れになる。
「何しやがる、このアマ！」
さっきまでのチャラい男の演技はどこへやら、男は拳を固めると

明花に殴りかかった。まずい、明花は座っているのだ。どう考えても、避けられない。俺はせめて明花の身代わりになろうと男の脛を狙って蹴飛ばした。男が怯む。

ポーチをごそごそと探っていた明花はストラップのついた小型の懐中電灯のようなものを取り出した。ただ少し奇妙なのは、その懐中電灯には電球がなく、代わりに二つの金属製の棒が突出していることだ。ボタンは一つで、何に使うかわからない。

だが、明花がボタンを押した瞬間、ようやくその機械が何なのかわかった。

それは、青白く発光しながら電流を散らしたのである。なるほど。スタンガンか。

「それは……スタンガンじゃねぇか！」

男が驚いたように喚く。明花は椅子から立ち上がると、勝ち誇ったように言う。

「そうよ。これはＦＢＩも採用していると言われるスタンガンよ。どれほどの威力か試すわけにはいかないから今まで使ったことないけど、いい実験台が見つかったわ」

ＦＢＩの話はともかく、そんな代物を見せられたら普通の人間は逃げ出す。この男もそうだった。思い切り後ずさり背後にあったテーブルに激突すると、這いつくばって逃げて行った。何事かと他のお客さんが唖然とした表情で彼を見送っていた。

「お前がスタンガンを持ってたなんて知らなかったぞ」

「そうでしょうね。言ってないもの」

明花は澄まし顔で答えた。くそう、こいつめ。

まあいいか。悪党を撃退できたことだし。

俺達はさっさと店を出た。店員が今にも走り寄ってきそうな雰囲気だったからな。店を出ると、次のアトラクションに向かった。休憩を挟んだ結果、ジェットコースターになったがな。

第四話

午後五時。時に日は沈み、賑やかだった遊園地も静かに目を閉じ、眠りにつこうとしている。俺達はそんな彼のシンボルともいえる大観覧車に乗り込んだ。『生ぬるい』乗り物の代表ともいえるが、俺が無理を言って彼女を納得させた。

観覧車は珍しく土足厳禁で、靴を脱いで入る必要があった。さらに、床は畳みで、座布団が二つ、向かい合えるようにして敷いてある。俺はその座布団の上に胡坐をかいて座った。下はジーパンなので、何の問題もない。

俺達は初めてお見合いをする男女のように無言で互いを見つめあった。山の向こうへ沈んでいく夕陽の優しい日差しが観覧車の中へと差し込んでくる。俺は眩しさに目を細めながら明花の整った顔をじっと見つめた。夕陽のせいか明花の顔の右半分には翳りが見えた。そんな彼女の姿を見ていると俺は不安に駆られた。

なんだか、明花がどこか遠くへ行ってしまうような気がして。俺の両手から何かがこぼれおちていくような気がして。

「……あのさ」

「なに？」

「……どこにも行くなよ」

明花は何当たり前のことを言っている、と言いたげな目でこちらを見返した。そしてふと微笑むと、俺を力一杯抱きしめた。

「何しやがる」

「あんたを置いてどこにも行かないわよ。私は」

明花が一回、指を鳴らした。がくん、と僅かに衝撃が伝わってくる。観覧車がストップした。

「一体何をした？」

「観覧車を止めたのよ。もう少しだけ、二人で楽しみましょ」

明花は突如肉食獣を連想させる笑みを浮かべると、俺を畳の上に

押し倒した。俺は明花の身体の隅々まで知りつくされたテクニックに、幾度となく喘がされた。
情事が済むと、二人して服を整え、観覧車を再開させた。
観覧車から降りると、係員がしきりに俺達に謝った。罪悪感を覚え、明花の方をちらりと見たが、彼女は澄まし顔で係員の謝罪を受け入れていた。大した奴だ。
俺達は遊園地を出ると、明花の力を使って一瞬で家へと戻った。
明花が作った焼き飯を食べながら、俺は考え込んでいた。
明花は本当に、何者なのだろうか。明花に聞けば、彼女は笑って、
「弓月春樹の彼女よ」
と胸を張りながら答えるだろうが。
「……何考えてんの？」
「え？」
「あんたがそんな顔をしている時、大概私のことを考えてるのよね」
「……よくわかったな」
「あたりまえじゃない。私はあんたの彼女なのよ」
予想通りの答え。俺は思わず笑ってしまった。
「何がおかしいわけ？」
「いや……ちょっと嬉しくなってさ」
明花は箸を置くと、にこりと笑った。そのちょっとした仕草にもどきりとする。やっぱり俺は、こいつには頭が上がらないな。
「でもそれ、私の姿で言われてもあんまり嬉しくないわね。鏡に向かって喋ってる気分」
「……この格好にしたのはお前だろうが」
「まあまあ、夜の楽しい遊びまでその格好でいてもらうから」
「じょ、冗談だろ」
「私が冗談を言うような女に見える？」
ずい、と明花が身体を乗り出してくる。俺は思わずその迫力に身を引く。明花が赤い舌を出し、唇の周りを舐めまわす。
俺は咄嗟に箸を投げ出すと椅子から立ち上がった。あまりの激し

さに椅子が転倒したが、そんなこと気にしている場合ではない。俺はそこから逃げようとした。
一方明花は、なんとテーブルを見事な放物線を描いて飛び越え、俺に抱きついてきた。上手く受け止めきれずに明花に押し倒される俺。床に叩きつけられた。衝撃で息が詰まる。
「じゃあ、楽しみましょうか」
俺達はなし崩しに、再び交わることになった。
明花に抱かれながらも俺はなお、言葉に言い表せぬ何かが胸の奥に引っ掛かっているのを感じた。
それが何だったのか、俺は後になって予感が的中したことを悟った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5720w/

一日限りの変身

2011年9月26日21時43分発行